

令和6年11月11日

太田市議会議長 高田 靖 様

創政クラブ 代表 大川 陽一 ㊞

会派行政視察報告書

会議名：第86回全国都市問題会議

会場名：兵庫県姫路市アクリエひめじ（姫路市文化コンベンションセンター）

会議テーマ：「健康づくりとまちづくり ～市民の一生に寄り添う都市政策～」

日程：令和6年10月17日（木）～18日（金）

参加議員

- ・大川 陽一
- ・久保田 俊
- ・高木 きよし
- ・高野 博善
- ・川岸 靖隆

会議の概要と主な講演内容について

第86回全国都市問題会議では、全国の市区長や市区議会議員などの自治体関係者約1,700名が参加。「都市のあり方が一人一人の健康づくりにどう貢献できるのか」についてパネルディスカッションも交えた議論が行われた。

全国的な超少子高齢化時代の中、生活習慣病などによる健康リスクの低減や健康寿命延伸のために健康づくり政策のさらなる推進が求められている。そんな社会的な背景を前提にそれぞれの講演者が意見を述べ合っている。

まず、基調講演では生物学者の青山学院大学の福岡伸一教授が「生命を捉えなおすー動的平衡の視点から」というテーマで講演。生物の体と街の構造の共通点を見出し、人の命を機械的に捉えるのではなく、絶えず変化し動き続ける動

的な平衡の観点から生命を考察するのは斬新な発想だ。生き物の細胞が破壊と再生を繰り返して新陳代謝をはかり成長していく様子を街づくりに置き換えるような感覚が求められるとの指摘に頷く参加者は多く見られた。

主催地である姫路市の街づくりの取り組みについては、清元秀泰姫路市長が説明。医師でもある清元市長の専門知識を活かした「市民の『LIFE』（命・暮らし・一生）を守り支える姫路の健康づくりとまちづくり」として、ICTを活用した健康施策やウォーカブルなまちづくりの推進について報告している。運動するという意識を持って歩くことは成人病予防につながる効果が高く、その重要性は広く周知されているところだが、歩いて楽しい街で暮らせば住民は自ずと歩く機会が増えることが期待できる。実際、姫路市の中心部は人気観光スポットの姫路城の存在も大きいですが、観光客にとっても歩くのが心地良い街であるとの印象を強く受けた。ウォーカブル事業のパイオニア的存在でもある姫路市の成功事例は、多くの自治体で参考となるはずだ。

一般報告では、まず筑波大学システム情報系教授の谷口 守氏が「生き物から学ぶ健康な街づくり」をテーマに講演。ここでも健康増進のために歩行の促進の重要性、そして生き物の特性を都市設計に活かす視点を取り入れることの重要性が語られた。流山市長の井崎 義治氏は「都市そのものを健康にする街づくり」をテーマに講演。流山市における健康街づくりで実施してきた政策を紹介。平成19年に健康都市宣言を行い、健康に関わる事業を打ち出してきた。兵庫県立大学の畑 豊氏は「IT/AIの健康分野への適用例」として、健診データの解析と歌唱による誤嚥予防効果との関係性について報告している。

ディスカッション形式の講演では、中央大学法学部教授の宮本太郎氏がコーディネーターを務め、高岡病院児童精神科医の三木崇弘氏、NPO法人日本栄養パトネット理事長の奥村圭子氏、茅野市長の今井敦氏、泉大津市長の南出賢一氏がパネリストとして講演。健康づくりを通じたまちづくりのあり方について、多角的な視点から様々な見解が述べられている。心理社会的側面から見た子どもの健康や、伴走型・自立支援型の栄養支援、社会インフラの健康、未病予防対策先進都市を目指した取り組みなどがテーマとして取り上げられた。

今回の会議で話し合われたことをまとめると、健康づくりを医療の枠にとどめず、都市政策の広範囲に組み込むことの重要性が強くクローズアップされたと言える。ICTの活用や市民参加型のまちづくり、幅広い年齢層のライフステージ

に応じた柔軟性のある多種多様な支援策が、今後の都市政策の重要なポイントになるとの認識が共有されたとの印象を強く受けた。

